

## 雲南の道 ～ 塩の交易とタカラガイ ～

上田信（立教大学）

### I : 塩の道

#### 黒井

- いまは廃坑になった塩井が、町の周囲に点在している。清代には 82 カ所あり、それぞれ黒牛井・竜泉井などと呼ばれていた。町に近い黒牛井を訪ねると、人が腰をかがめてようやく歩けるような坑道が、山地の奥深くに向かって穿たれている。
- 伝承では地元の牧童が、失踪したウシの跡をたどって山に分け入ったところ、塩水の湧き出る場所を発見したのだという。
- 町のはずれに製塩場が復元され、いまは見ることのできない繁栄期の製塩の様子をパネルなどで説明している。製塩の作業は、すべて人力による。
- 竹の筒を用いた長さ 3 メートルほどの水鉄砲のような「竹竜」とよばれる道具を、井戸の下から順次何段かに設置して塩水を吸い上げたり、巻き上げ機で吊り上げたりして地表に汲み上げる。
- 「鹵夫」と呼ばれる男たちが塩水を運搬した。背負った木製の筒には、塩水がこぼれ落ちないように竹で編んだ蓋を被せた。
- 運搬は朝まだ空が暗い内から始まり、午前いっぱい行われる。1 回運ぶと竹の札が手渡される。昼になると仕事は終わり、この札の数に応じて賃金が支払われる。
- 村人の回想によると、朝から日が高くなるまでのあいだ、塩井から製塩までの石畳の道は、鹵夫が川の流れのように引きも切らなかったという。つらい仕事ではあるが、出来高制の賃金が良く、地元の男たちが独占していた。
- 製塩場に隣接した傾斜地には、棚田のような塩水を天日干しにする皿池が並ぶ。
- 濃度が高くなった塩水は、レンガづくりの竈のうえに 3 列に並ぶ鍋に注がれ、一昼夜、7～8 時間ほどを費やして、じっくりと煮詰められた。
- できあがった塩はきわめて硬く、直径 80 センチメートルほどの中華鍋を伏せたような形をしている。重さは 80 キログラムほど。これを鋸で二等分ないし四等分に切り分ける。
- 元朝は雲南を支配下に収めると、完者兀と漢字で表記されるモンゴル人を、黒井の塩を管理する威楚路塩使司提挙というポストに任命し、塩の増産と管理機構の整備を行わせた。労働者や商人が集まり、市街が形成され、町の南北を結ぶ五馬橋も、その時期に架けられた。元代の 14 世紀以降、製塩の制度もしだいに整っていく。
- 漢族・回族・イ族のあいだで、塩水を汲み出す権利をめぐる争いが絶えなかった。元代から明代にかけて塩場を管理したムスリムの馬守正は、10 日をサイクルとして、それぞれの民族が交替で 3 日ずつ汲み出すこととし、十の日は定期市の日と定め、対立を解消したと記されている。

- 黒井鎮の井塩も国家の管理下に置かれ、その販売からあがる税収入は、雲南の財政に欠かすことができない比重を占めた。明代には黒井の塩による財政収入は、雲南の全体の税収入の67パーセント、清代中期には50パーセントを占めた。
- それぞれの製塩場で生産された塩は、どの地域に供給するのか、厳密に決められていた。こうした区域を、「行塩地」という。商人は税を納めて規定された区域で販売しなければならない。
- 清代を例にとると、黒井鎮で造られた塩は、昆明を中心に雲南の中南部から貴州省の西部、広西省の西北部にひろがる広い範囲を販売区とした
- 黒井鎮からそれぞれの販売地に向かう沿道にも関所が各所に設けられ、塩が正規のものであるのか調べられた。
- 黒井鎮を見下ろす小高い土地に、この土地の豊かな財力によって建てられた大井竜祠がある。坂道を上り祠の小さな入り口をくぐり抜けて振り返ると、通路の上に舞台がしつらえてあったことが判る。
- 塩を産する井戸を守護する竜王に向かい合うように、舞台は建てられている。黒井鎮が塩業で栄えていた時期には、省都の昆明の劇場とひけを取らない設備を備え、雲南で一流の劇団が招かれたのだという。
- 「靈源普沢」と黒地に金色で大書された扁額を見ることができる。目を凝らしてみると、この扁額は雍正三年に、清朝皇帝から下賜したものであることが判る。
- 山間の小さな黒井鎮が、いかに清朝の財政に貢献していたかが明らかとなるであろう。
- 康熙30年に河川の増水のため大きな被害を受けたということがわかる。
- この年の7月1日に降り始めた豪雨は、翌日にも降り止まず、川の水が増水し、塩井を水没させ五馬橋を押し流した、17日には地盤がゆるんでいたためであろう、関廟の裏山が崩れ、廟が壊れ、祭られていた神像が土石流に乗って河川に押し出され、川の流れを塞いでしまったという。
- この災害は、単なる自然災害ではない。背景には、塩を焼くために大量の柴・薪が周囲の山地から切り出され、黒井鎮の周辺の急峻な山々が、樹林のない禿げ山になってしまったために、土石流が発生したのである。
- 最盛期にこの山間の狭い土地に、製塩業の従事者を中心にして3万もの人口が住み、年間に5千トンほどの塩を焼いたとされる。
- 塩を焼くには、1トンの塩を生産するには、3トンの木材が必要であり、住民が煮炊きなど消費する薪は年間に200キログラムほどは必要である。おおよそ年間2万トンの速度で、周囲の山地の樹木が姿を消した計算になる。
- 弘暦が出した上諭には、
- 聞くところによると、近年、童山（禿げ山）が次第に多くなり、薪の価格は日毎に高くなり、しかも塩水の濃度も低くなって、塩の生産が困難になり、発給された薪購入の補助費では、購入する薪炭に追いつかないという（乾隆4年<1739年>8月戊戌）。

## チベットの塩井

- 『塩井郷土志』には、製塩の様子を次のように記す。
- 塩田の様子は、現地の住民が瀾滄江の両岸にテラスを積み重ねるように架け、まるで内地に

みられる水田の畦のようである。

- 塩池を傍らに掘って、いつもは塩水を貯めておき、夏から秋にかけて（雨期の増水のために）井戸の口が水没すると、貯めていた塩水を使う。
- 東岸には蒲丁と牙喀という二つの区画、西岸には加打という区画がある。東岸で生産された塩は純白で、西岸のものはやや赤く、雲南では「桃花塩」と呼ばれ、白い塩よりも高額で取り引きされ、茶の色を際立たせる。
- ナシ族の女性は 3～6 メートルの深さの井戸に梯子で下り、背負った木の桶に塩水を注ぎ、河岸の急斜面を踏みしめながら、塩池に向かう。
- 二百戸あまりの住民は、みな塩田を持っていて、生計の支えとしている。61 戸が製塩を専門にしている。製塩を行うのは、ナシ族である。
- 乾燥した風にさらされ、太陽の熱をあびて、陽が峡谷に没するころになると、テラスの塩水の上に、結晶となった塩の花が浮かぶ。女性たちは木のヘラで菱形に固まり始めた塩を集め、竹かごに入れて余分な水分を落とす。
- 塩井の塩は熱処理が加えられていないために質が悪く、家畜に与えたり、ウシの皮膚に寄生虫が食い込んだときに、その塩を塗って治療したりするために用いた（斯農村での聞き取り）。

## II. タカラガイ

雲南およびチベット高原東縁部を調査した結果、チベット系・モンゴル系およびツングース系の諸民族のあいだで、儀礼に不可欠な物品としてタカラガイが見いだされることが明らかとなった。従来、内陸アジアのタカラガイは琉球近海で採取されたものが、東シナ海交易朝貢交易によって中国に運ばれ、モンゴル高原・中国東北部に供給されていると漠然と推定されてきた。しかし、内陸にタカラガイ帯とでも呼ぶべき地域が南北に走っているところから、インド洋→ベンガル湾→インドシナ半島→中国雲南→チベット高原東縁部→モンゴル高原という壮大なルートが存在が予測される。

マルコポーロ『東方見聞録』では、元代の雲南においてインドからもたらされたタカラガイ（子安貝）が通貨として流通していたとの記載がある。モンゴル帝国成立から 19 世紀アヘン戦争までの時期に、中国・東南アジア・インド東北部・チベット高原・モンゴル高原・シベリア東部および日本・琉球を包摂する広大な交易圏が存在し、モノとヒトと情報とが激しく交流していたことを明らかとし、その範囲を「東ユーラシア」と名付けた。この範囲は、現代的には「東アジア共同体」とオーバーラップするものである。今回、タカラガイ流通を文献史料の収集と分析、およびフィールドワークと発掘資料の確認など多角的な視点から解明し、この交易圏の生成プロセスを提示したい。